

2024年3月17日 No. 3711

先週の講壇から

“ 安息日には憐れみを ”

マタイによる福音書 第12章1節～8節

聖句 『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、…罪もない人たちをとがめなかったであろう。(12:7)

1. 《炎のランナー》 1924年のパリ五輪に英国代表で出場したリデルは「安息日である日曜日には走らない」という自らの信念を理由に、得意な百m走を辞退、代わりに4百m走で金メダルを獲得します。後に、宣教師として中国天津に渡り、日本軍の捕虜収容所で亡くなるのですが、リデルの神がかり的な意志の強さ、世間の圧力や国家の権威にも屈しない信念に圧倒されました。
2. 《信念を貫く人》 日曜日にサッカーに興じている少年に「日曜日には教会に行きなさい」と、リデルが優しく諭す場面があります。日本の観客には「律法主義」のように受け止められましたが、日曜日に礼拝に行くのは「律法だから」ではなく「信念だから」です。残念ながら、この国では、自らの信念を貫くという生き方は理解されていません。信念は自分のものであって、他人に押し付けるべきものではありません。況してや「建国記念日」のように、国家権力が「休日」を餌にして、国民に国家神道の信仰を浸透させよう等というのは言語道断です。クリスチャンでも、「仏式や神式の葬儀には出ない」と言いながら、「建国記念日／紀元節」に異議を唱えない人が多いのです。信念が無いと言わざるを得ません。
3. 《信念と律法と》 「信念」と「律法」とは似て非なるものです。たとえ同じ事を行なっているとしても、他人から命じられて行なっていれば「信念」ではありません。自分が得心して行なうのです。新約聖書にも「律法主義」は潜んでいますし、旧約聖書の中にも素晴らしい「福音」が一杯あります。イエスさまは、細かい戒律を全ての人に杓子定規に守らせようとする「律法主義」を批判されたのです。律法の本質は愛です。それなのに学者や祭司たちは、律法から外れた暮らしをせざるを得ない娼婦や徴税人を切り捨てていました。むしろ、愛があれば、胸が痛むはずです。深い悲しみが湧き上がって来るはずです。悲しみは愛と深く繋がる感情です。泣かないことは「強さの証明」ではなく「鈍感の証明」です。神さまは何を求めておいでか、真剣に思えば、為すべき事は自ずと見えて参ります。

朝日研一朗牧師